

## 外国語活動

### 慣れ親しんだ英語で、人とかかわることを楽しむ子どもの育成

～聴いた英語をもとに、自己表出をうながしていく活動の構想～

子どもたちが英語への興味や関心を高めていくために、英語を聴いたり人とかかわったりすることを楽しんだりするために、どんな授業を創ったらよいのか研究実践を重ねてきました。

一人一人が「人とかかわる」意識を持ちながら、用いた英語をつい口ずさんでいたり、やりとりをしてみたいという思いを持って活動したりしている子どもたちの姿をご覧ください。

(外国語活動主任 築島 淳)



#### 1 研究の経緯と研究主題、副主題の設定

##### (1) 研究の経緯

本校外国語活動部では、平成20年度から21年度までの2年間、「相手を大切に、英語でのコミュニケーションを楽しむ子どもの育成」を研究主題として、「英語に親しむこと」、「人とかかわることのよさ」に視点を当てて研究を進めてきた。成果としては、「英語で話してみたい」、「相手の伝えたいことをじっくり聴こう」と感じられるような活動を行ったり、「聴く」場の設定や活動の工夫をしたりすることで、インプット（教師や友達の話す英語や視聴覚教材の音声）に対してじっくりと聴く姿勢が見られるようになった。しかし、課題として新しい英語と出会った際に、聴いたり話したりすることへの抵抗を持つ子どもが見られる。また、英語を使ってみてみたいと思う一方で、使うことへの不安を感じている子どももいる。このことから、英語を用いた活動に積極的に取り組んでいくためにも、子どもが出会う英語や教師の提示の仕方を見直し、英語を用いて活動することに楽しさを感じられるようにしながら、繰り返しの活動を工夫して取り入れ、英語に慣れ親しませていく必要があると考える。

##### (2) 学習指導要領との関連

新学習指導要領では、外国語を通じて、異なる言語や文化を理解したり、他者と積極的にコミュニケーションを図ったりすることが重要であると述べられている。また、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむことが大切であるとされている。活動を設定する際には、子どもが学習の興味・関心を持続できるようにしたり、目的意識を感じたりできるようにしていくことが重視される。また、コミュニケーションの素地を養うための「聞くこと」、「話すこと」のバランスについても見直していく必要があると思われる。

##### (3) 研究主題の設定

そこで、本校外国語活動部では、全体提案を受け、英語を用いたやりとりを通して、慣れ親しむ英語の表現を増やしていったり、工夫しながら人とかかわることに楽しさを見出したりできるようにしたいと考えた。そして、それらの活動に積極的に取り組めるようにすることが、コミュニケーション能力の素地の育成につながるととらえ、「外国語活動での学びの楽しさ」を次のようにとらえた。

#### 【外国語活動での学びの楽しさ】

相手の思いや伝えたいことを考えながら英語を使ってコミュニケーションを図ったり、外国の文化や言葉の違いに触れたりできること。

また、全体提案の『学ぶことへの期待感』、『学んでいるときの充実感』『学んだことへの満足感』については、次のように考えた。『学ぶことへの期待感』については、活動の楽しさとともに、「英語を用いてやりとりしたい、新しい英語と出会いたい」という思いがあると考え。『学んでいるときの充実感』については、活動に没頭し、相手意識があるときに感じる考える。外国語活動の中では、「英語を一生懸命聴こう、反応しよう」など、相手を受け止めたり、どうにか伝えようとしていたりしているときに感じる思いがあると考え。また、『学んだことへの満足感』については、

第2年次以降の子どもの実態を十分把握し、満足感を味わっていきけるような授業を創っていきたいと考えている。

そして、子どもたちが英語に対して興味・関心を持ち、人とやりとりしたことから感じられる達成感や楽しさを味わうことが、自分から進んでコミュニケーションを図っていこうとする際のモチベーションとなるのではないかと考え、研究主題「慣れ親しんだ英語で、人とかかわることを楽しむ子どもの育成」を設定し、3年間の研究実践を行うこととした。子どもたちが英語の学びの楽しさを実感していく手立てを講じていくことによって、活動で用いた英語を生かしながら積極的に人とかかわろうとする子どもを育成していきたいと考えた。

#### (4) 研究の方向と副主題の設定

研究の第1年次は、外国語活動の授業で子どもたちが「聴いた英語が分かってきた」「他の人と英語を用いてやりとりしたい」ということを感じられるようにしていくことが、英語を用いることへの意欲を高めることにつながると思い、まず触れる英語を吟味し、触れさせ方、子どもが英語を用いていきたいと思える活動を工夫していくことが大切であると考えた。よって、副主題を「聴いた英語をもとに、自己表出をうながしていく活動の構想」とし、以下の2点を研究の柱として実践していくこととした。

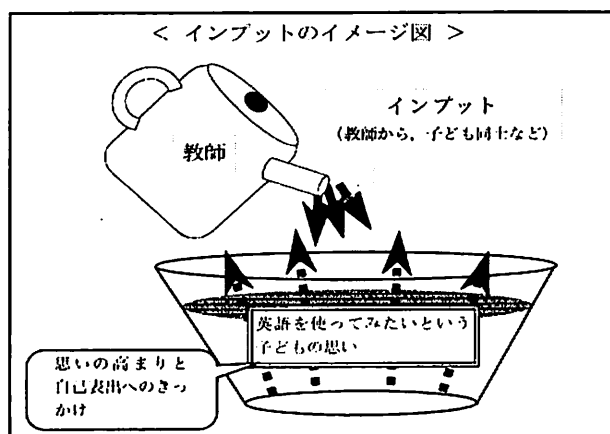
- (1) 英語のインプットの在り方
  - (2) 子どもが積極的に英語を用いようとするための手立て

## 2 研究内容

### (1) 英語のインプットの在り方

研究副主題にある「自己表出」をうながしていくためには、十分に英語に慣れ親しみ、英語を使ってみたいと感じられることが必要であると思われる。しかし、第2外国語の習得や子どもの発達段階、感情から考えても、子どものアウトプットを急ぎすぎないようにしたい。そして、英語に慣れ親しむためには、繰り返し聴く楽しさとともに、英語を用いたやりとりの楽しさを感じられるような手立てを講じていくことが大切であると考えた。繰り返し聴く楽しさとは、相手の伝えたいことを考えながら聴いて、だんだん分かってきたり、自分と関係付けながら聴いたりすることから生じてくるものととらえた。また、英語を用いたやりとりの楽しさとは、相手意識を持って、工夫しながら相手に伝えようとしているとき、伝えられたときに感じるものととらえることとした。

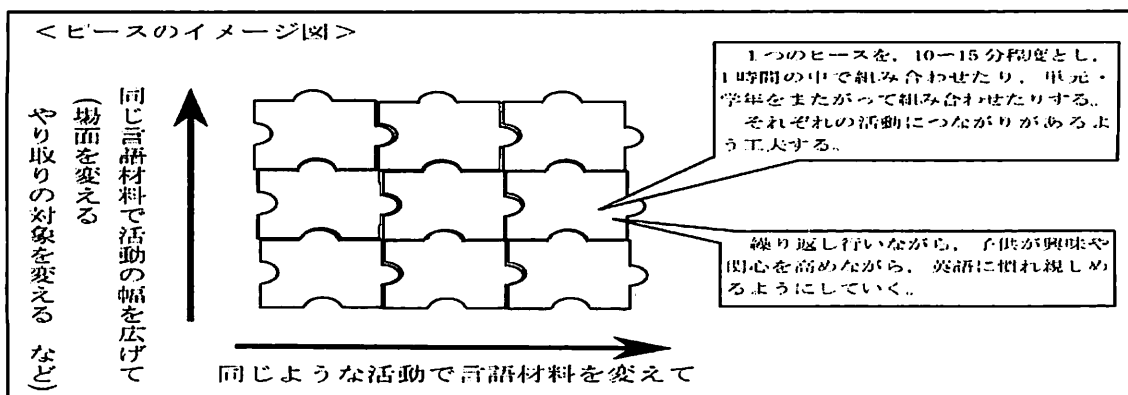
子どもが英語に慣れ親しめるようにするために、さまざまな活動や単元で、繰り返し聴きながら出会う英語を広げていくようなスパイラルな活動を開発する。そして、教師がリードしながら「相手の言いたいことが分かった」と子どもが感じられる場、子ども同士でやりとりしたり聴き合ったりする場を設定していくことで、英語を使ってみたいという意欲を育てていく。



#### ア 子どもが繰り返し聴き、組み合わせられる活動（ピース）の開発

外国語活動では、「英語に慣れ親しむ」ための活動として、これまでじっくり聴くことを意図したクイズや読み聴かせ、英語のリズムを感じられるような英語の歌などを取り入れてきた。しかしながら、出会う英語が多くなったり、センテンスを言わざるを得なかったりすると抵抗を感じ、活動が停滞してしまうことも予想される。そこで、「聴く」ことをベースとして、反応したり口ずさんだりできるような活動を工夫する。また、1時間、単元、学年の中だけでなく、それぞれに渡って組み合わせたり、広げたりできるような活動を考えていくこととした。イ

メージとしては、縦・横のつながりを持ち、組み合わせているパズルのピースのような活動である。(下図) これらを工夫していくことで、英語に慣れ親しんでいけるようにした。



### 5年生「I like math.」、「What will you have?」、「Olympic in Canada」での実践

どの単元でも「Who is this?」ゲームを取り入れ、ルールを理解した上で、キーセンテンスに慣れるようにした。「Who is this?」ゲームは、カードの人物について教師からの3ヒントから当てたり、頭上に掲げたカードについての問いかけに答えたりするゲームである。

「I like math.」では「He is a teacher. He likes math.」という教師のヒントから誰かを当てるクイズを行った。「What will you have?」では、「What will you have?」の教師の答えをヒントに当てるクイズを行った。「Olympic in Canada」では、「I am from Japan. I can skate. …」などから当てるクイズとした。

言語材料を変えても同じような活動を取り入れることで、それまでの活動で扱った英語をヒントを引き出すための質問として子どもが言う姿が見られた。扱うテーマや言葉などの英語の広がりを持たせながらスムーズに活動に取り組むことができた。

### イ 教師とのインタラクションの場の設定

外国語活動の目標は「コミュニケーションの素地を養う」ことである。子どもにアウトプットを無理強いするのではなく、教師がモデルとなったりリードしたりしながら、子どもの実態に合わせたインタラクション(双方向のやりとり)を取り入れていくことで、子どもが英語を用いたやりとりの機会を増やし、新しく出会う英語への抵抗が少なくなるようにしていく。

### 5年生「What will you have?」の実践

この単元では、食べ物を中心とした好みや欲しい物についてやり取りしながら活動を進めた。多くの子どもとやり取りできるよう教師が働きかけながら次のようなやり取りを行った。

T: I like tomatoes. Mr. ○○, Do you like tomatoes?

S: Yes.

T: Mr. ○○ likes tomatoes. Mr. △△, how about you?

S: I like ….

やり取りする際には、まず教師自身のことを伝えてから行うようにし、教師の問いかけがうまく伝わらない場合には、選択肢を出すなどの支援を行いながら、子どもそれぞれの好みや欲しい物について意思表示していけるような活動を行った。



### (2) 子どもが積極的に英語を用いようとするための手立て

子どもは、外国のことに興味を持ったり、英語を使ってみたいと思ったりしている。しかし、英語のやりとりをすることに対しては、不安に思う子どもも少なくない。「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目指し、体験的に人とかかわる場面を設定し、子どもが目的意識を持ちながら活動に取り組めるようにする。「英語を用いてかかわれた」という達成感が、将来の英語学習に意欲をつなげていけるのではないかと考えている。

### ア 子どもが英語を聴いてみたい、使ってみたいと感じる活動の工夫

子どもたちは日常生活の中で、さまざまな媒体を通して、知らないうちに英語に触れている。そこで、単元や活動のテーマに合わせて、時事的な物や流行している物を教材化していくことで、子どもの関心に応じた単元を組むことができると考える。また、何より外国の人との交流

は、子どもがチャレンジしたり、達成感を感じたり、文化の違いを目の当たりにしたりする活動である。「人とかかわり」を軸に子どもの発達の段階に応じた単元や活動を設定していくことで、目的意識を高めながら活動に取り組めるようにしていく。アウトプットを伴う活動の際には、活動への見通しや活動の跡が分かるようなワークシートを利用し、英語を用いたやりとりの一助としていくことで、英語を使ってみたいという思いを達成感につなげていけると考えた。

#### 6年生「ようこそ留学生」での実践

10月から7時間にわたり、2回目の交流にむけて活動した。7月に行った1回目の交流の際の留学生とのやり取りに付け加え、得意なことや日本の文化についても伝えたいという子どもの思いに寄り添っていけるような活動を行った。子どもの思いはあるが、伝える難しさが予想され、Show and tell 形式を取り入れることとした。さらに、活動の累積として残しながら、単元の流れが分かるようなワークシート（下図）を活用した。

このワークシートを用いながら、留学生との交流会では、“Who is this?”, “Can you do this?”, “Let’s make an origami. Like this, ….”といったやりとりが行われた。単元を通して、目的意識をしっかりと持ちながら活動が行われ、それぞれが交流できたことに達成感を感じていた。



Show and tell 形式のワークシート

#### イ フィードバックを生かした支援と場の工夫

子どもは英語で活動する際に、聴いたことのある英語を探りながらじつくりと聴いたり、どきどきしながら人とかかわろうとしたりしている。子どもに活動の中で見られたよさをしっかりとフィードバックしていくことで、子どもがさらに意欲的に活動に取り組んでいけるようになると思う。活動の中には「人とやりとりしている」といった動的な活動と「じつくり聴く」といった静的な活動がある。動的な活動については、即時フィードバックしていくことで、より意欲を高めながら活動をしていけると考える。静的な活動についても、教師とのインタラクションを生かして聴いたり反応しようとしたりしている姿を賞賛していく。そして単元終末での振り返りの場を設定しながら子どもの成長を見取り、子どもに返していくことで、活動への充実感を感じていけるようにする。

#### 子どもの振り返りと教師の支援

子どもたちの振り返りは、当初は、活動の中で行われたゲーム的な楽しさに関するものが多く見られた。コミュニケーションを図る際の態度や、活動の姿勢、気付きなどを賞賛したり、振り返りカードに教師の言葉を書いて授業で紹介したりしてきたところ、人とかかわりや文化・言葉への気付きなどに興味を持ち始める子どもが多くなり、下記のような振り返りが見られた。

- ・ はじめはよく分からなかったけれど、何回も聞いているうちに、だんだん何が言いたいのかわかってきた。
- ・ ドキドキしたり、身振り手振りも入ったりしたけど、英語で伝えられて楽しかった。

#### 6 成果と課題

授業の中で英語を聴く場面で、子どもが聴くことを十分に意識できるような支援や活動の工夫をしたり、聴いた後で子どもにやりとりにつなげる投げかけをしたりしてきた。その結果、友達とかかわる活動の中でも、しっかりと相手を意識しながら活動したり、英語を口ずさんだりする姿が見られるようになってきた。また、それぞれがやりとりを大切にしていくことで、より意欲的な姿も見られている。今後も、自然な形で英語のやりとりを楽しんだり、やってみたいと思ったりできるような活動を工夫したりして、子どもとともに楽しめる授業を創っていきたい。